

色をつけないこと

フランシス・ウィリアムズ問題

久野 陽一

フランシス・ウィリアムズ (Francis Williams) というジャマイカ生まれの人物がいる。1762 年に同地で死去した。彼は、自意識を持って文学作品を創作することのできた、英語圏で最初の黒人作家とも考えられる人物である。彼はラテン語で詩を書いた。しかし、不幸なことに、彼の作ったラテン語のオードは、「擬似科学的人種差別論者」(Fryer 159) として悪名高いエドワード・ロングの『ジャマイカ史』(Edward Long, *The History of Jamaica*) に引用されるという形でしか、残されていない。

ロングは、ジャマイカに農園を所有する地主の息子で、1734 年にコーンウォールで生まれ、1757 年から健康を害して帰国する 69 年までジャマイカで過ごした。彼の帰国後の 1772 年、裁判官の名前から「マンسفールド判決」(Mansfield Decision) と呼ばれる、人道的にも後の奴隷貿易廃止運動の展開からしても画期的な判決があった。それは、ジェイムズ・サマセット (James Somerset) という逃亡奴隷の処遇をめぐる争われた裁判で、黒人奴隷はいったんイングランドの地を踏んだ瞬間から自由を保障される (本人の意志に反して植民地に連れ戻すことはできない) という判決が下った。ロングは、匿名でこれに異議を唱えるパンフレットを出している。そのなかで彼は、「印刷術の発明は (私の間違いでなければ) 軍人のおかげで、火薬は聖職者のおかげだとされてきた。おそらく経度は仕立屋に発見されることになろう。しかし、黒人を洗って白くする技術は、幸いにも法律家のために残しておかれたようだ」(Long, *Candid*

Reflections iii) と、皮肉を込めて出鱈目に人類に文明をもたらした発明・発見を列挙しながら、乱暴に人種の肌の色と文明を結びつける。1774 年に出版された『ジャマイカ史』においても、同様の文明論が展開される。それゆえ、そのなかでウィリアムズの詩を紹介したロングの意図は、「黒人を洗って白くする技術」の不可能性を唱え、黒人に対する白人の優越性を例示することであった。¹

言うまでもなく現在からすればまったくの「出鱈目」であるが、ここでは、ウィリアムズを紹介することにおいて、いかにしてこの目的が達成されているのか、また、『ジャマイカ史』の中心近くに埋め込まれたウィリアムズの詩は、彼の黒人としての自意識のいかなる面を明らかにしているのか、ということを検討してみたい。そこで、まずウィリアムズの伝記的事項を確認しておこう。

全三巻からなる『ジャマイカ史』の第二巻において、ロングは一章をさいてウィリアムズを紹介している。その冒頭は以下のように始まる。

この島で著名な人物で、イングランドでも多くの注目を集めた人物を紹介することを、本書ではこれまで控えてきた。できうる限りの公平さで、私は彼を評価してみたい。そして、黒人は白人に劣るという事実を証明しようと、これまで私が本書でおこなってきた議論を覆すだけの十分な才能と知性をこの人物に発見できるかどうかは、読者の判断に委ねることにしよう。もう読者にはお分かりのように、私はフランシス・ウィリアムズについて、これから述べていきたいのだ。彼は、自由黒人ジョンとドロシー・ウィリアムズの息子としてこの島で生まれた。(Long, *The History of Jamaica* 2: 475)

この父親ジョン・ウィリアムズは奴隷であったが、所有者の遺言によって

自由を手に入れ、その後、イギリス本土とジャマイカ間の貿易をおこなって成功した。息子のフランシスは、若い頃をイギリス本土で暮らした。ロングによると、フランシスは、モンタギュー公爵（John Montagu, 2nd Duke of Montagu）の加護によって、イングランドのグラマー・スクールに通わされる。これは、適切に教育をした場合、黒人も知性を得ることができるかという一種の実験であった。その後、ウィリアムズは、ケンブリッジ大学に入学して数学を学んだとされている。しかし、彼の教育にモンタギュー伯爵が関わっていたことを示す資料やケンブリッジ大学に入学したという記録はない。² 1721年にウィリアムズは、法学院（Lincoln's Inn）のメンバーとして承認されている。ただし、法律家として活動した記録はないので、当時の紳士階級に属する子弟の教育機関として法学院に属したものと思われる。父親の死後、1723年にウィリアムズはジャマイカに戻り、残りの生涯をこの島で過ごすことになる。ロングによると、彼は当時の首都スパニッシュ・タウンに学校を設立し、黒人の子供たちに読み書きやラテン語、数学などを教えた。父親やその他の家族の遺産の大部分を相続したウィリアムズだが、晩年にかけては借家住まいで、かなり身代が傾いていたようである。

財産のことは別にしても、ウィリアムズは、自由民としてそれなりの経歴を持っていたと言ってもよいであろう。しかし、ロングが彼を取り上げる目的は明らかに称賛することではなかった。ロングの言う「できうる限りの公平さ」は、たとえば次のような好人物とはほど遠い錯乱した人物像をウィリアムズに与えている。

この人物の全般的な性格について言うと、彼は傲慢で、独善的で、自分の教養を鼻にかけて仲間の黒人を見下し、自分の両親を侮辱し、自分の子供たちや奴隷に対しては、ほとんど残酷といってよい厳格さで振る舞った。（2: 478）

こうした性格的にも道徳的にも劣っているという人物評に続けて、ロングは、ウィリアムズが自分を「黒い皮膚で演じている白人」(“a *white man acting under a black skin*,” 2: 478) と定義しているとした上で、問題のラテン語の詩を引用して、その英訳を付している。それは、新たにジャマイカ総督として就任することを記念してジョージ・ホールデン (George Haldane) に捧げた、ラテン語のオードである。ウィリアムズは「この種の作品をラテン語で書くことが好きで、新しい総督が来るたびに詩を贈っていた」(2: 478) と、ロングは述べている。ラテン語で詩作する能力は当時、ジェントルマンの資質として高く尊重された。ウィリアムズがホールデンに贈った詩は、18 世紀のイギリスで多く見られたタイプのラテン語の詩である (詳しくは Gilmore を参照)。

この詩のラテン語を正しく評価することは筆者にはできないが、大きな偏見を持った著者による引用であるだけに、この詩の信憑性を疑ってみることも可能かも知れない。ロングは、そのウィリアムズ作とされるオードに対して、事細かに古典作品からの借用を脚注で指摘して、オリジナリティの欠如を示そうとしている。ここではロングによる英訳を使用してこの詩の内容を検討したい。問題は、「黒い皮膚で演じている白人」ウィリアムズがこの詩において何を語ろうとしているのかである。

この詩の基本的な趣向は、新しい総督就任の吉兆を言祝ぐというもので、次に挙げる英訳の一節に端的にあらわれている。

Rash councils now, with each malignant plan,
Each faction, that in evil hour began,
At your approach are in confusion fled,
Nor, while you rule, shall rear their dastard head. (2: 481)

すなわち、ジャマイカは不幸を経験してきたが (この詩のなかではフラン

スの植民地との争いが含意されている)、そこにホールデンが新しい総督としてやってくることによって、政治的混乱が「退散し」、彼が「統治しているあいだ、その卑劣な首をもたげることのない」ことを期待するというのである。それはまた続いて述べられるように、「主人と奴隷」双方を救うことでもあった。

Alike the master and the slave shall see
Their neck reliev'd, the yoke unbound by thee. (2: 481)

このような趣向が基本であるため、ホールデンは「シーザー」にさえ喩えられるが、注目したいのは、そのとき詩人が喚起している「詩神」が「黒い」ことである。

Oh! *Muse*, of blackest tint, why shrinks thy breast,
Why fears t'approach the *Caesar* of the *West*! (2: 483)

そして、詩人は自らを「黒いアフリカ人」(“the sooty *African*,” 2: 483) と呼びながらも、肌の色による差異を無効であるとする。なぜなら、以下の詩行に見られるとおり、彼の詩は「皮膚」ではなく「心」から流れ出たものだが、「徳も思慮も肌の色には制限されない」、「何ものも誠実な心に色をつけたりはしない」からである。

Yet may you design accept this humble song,
Tho' wrapt in gloom, and from a falt'ring tongue;
Tho' dark the stream on which the tribute flows,
Not from the *skin*, but from the *heart* it rose.

[...]

Nor virtue's self, nor prudence are confin'd

To colour; none imbues the honest heart; (2: 483)

ここで根底にある考え方は、黒人と白人どちらかの属性ということではないものとして「心」を基準にするというものである。ロングによると「黒い皮膚で演じている白人」だとされたウィリアムズが主張しているのは、このような肌の色の相違を無化しようというメッセージなのである。これは当初のロングの意図を裏切るメッセージだと言ってもよい。

しかし、新しい総督を称えるはずのこの詩には、結論部に向かって屈折が起こる。まず、「黒い服を着ているが、あなたの体は白い」(*"Thy body's white, tho' clad in sable vest,"* 2: 483) と、ホールデンに喪服を着せ、「黒い皮膚で演じている白人」と同等にする。そして、「謙虚な詩」を彼に捧げていたはずの詩人は、次のように自らを称え始める。

An heart with wisdom fraught, a patriot flame,
A love of virtue; these shall lift his name
Conspicuous, far beyond his kindred race,
Distinguish'd from them by the foremost place. (2: 483)

すなわち、彼は「英知と、愛国の炎と、徳への愛とで満ちあふれた心」を持っており、そのために、「彼の名は同じ人種の者たちとは異なつて遙かに際立ったものとなるだろう」というのである。肌の色には関係のないはずだった「誠実な心」が、「愛国の炎」で高められることによって変質した瞬間である。そのとき詩人は、他の黒人とは違う何かになる。これは、ロングによる人格批判と呼応する。自分の奴隷を所有していたウィリアムズも、ジャマイカ植民地の当時の体制を保守したい「愛国者」であった。こうして詩人は、自らを新しい総督と同じく高められたところに置いて、自賛するのである。それは、黒人としての自意識の屈折あるいは偏向でも

ある。

続けて詩人は、「この豊かな島で生を受け、英国で育てられた」(“In this prolific isle I drew my birth, / And *Britain* nurs’d,” 2: 483) とも述べている。『ジャマイカ史』に関してエリザベス・ボールズ (Elizabeth A. Bohls) は、ロングにおけるイギリス帝国のナショナリズムと本土に対してジャマイカ植民地の利権を保持したいクレオールのア国心との分裂を、同書における風景描写の美学的イデオロギーを通じて論じているが、同様の分裂がウィリアムズにも認められる。ただし、彼の場合は、肌の色に関わるアイデンティティの分裂がそこに加わっている。そして、ウィリアムズが語りたいのは、その解消の可能性であり、ロングの意図はその不可能性を示すことなのである。スパニッシュ・タウンの学校でウィリアムズがもっとも目をかけた黒人の子供は、数学を勉強しすぎて狂気に陥ったと、ロングは述べているが、彼は同じ狂気をウィリアムズにも読み取らせようとしているのだ。

残念ながらウィリアムズには十分に押し進めることはできなかったが、おそらく解消の可能性は、色をつけることのできない「心」というモチーフに潜んでいる。そこには後の時代の奴隷貿易廃止運動に関わった黒人作家たちと結びつくスタンスがある。しかし、ほんの短い詩の一編、しかも批判的かつ偏見に満ちた人物による引用という形で残されたもののみで結論を下すことは、ウィリアムズに対してまったくフェアではない。そこから見えてくるのは、現在ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館が所蔵する、けっして上出来とは言えない彼の肖像画のように、ゆがめられた黒人作家の姿でしかないからである。

注

1. ロングについては Kitson および Wheeler を参照。

2. 以下、ウィリアムズの伝記に関する事項は、ロングの他、ジョン・ギルモアによる記述 (Dabydeen *et al* 529-31) を参照。

引用文献

- Bohls, Elizabeth A. "The Gentleman Planter and the Metropole: Long's *History of Jamaica* (1774)." *The Country and the City Revisited: England and the Politics of Culture, 1550-1850*. Eds. Gerald MacLean, Donna Landry, and Joseph P. Ward. Cambridge: Cambridge UP, 1999. 180-96.
- Dabydeen, David, John Gilmore, and Cecily Jones, eds. *The Oxford Companion to Black British History*. Oxford: Oxford UP, 2008.
- Fryer, Peter. *Staying Power: The History of Black People in Britain*. London: Pluto, 1984.
- Gilmore, John. "The British Empire and the Neo-Latin Tradition: The Case of Francis Williams." *Classics and Colonialism*. Ed. Barbara Goff. London: Duckworth, 2005. 92-106.
- Kitson, Peter. "'Candid Reflections': The Idea of Race in the Debate over the Slave Trade and Slavery in the Late Eighteenth and Early Nineteenth Century." *Discourses of Slavery and Abolition: Britain and Its Colonies, 1760-1838*. Eds. Brycchan Carey, Markman Ellis, and Sara Salih. London: Palgrave Macmillan, 2004. 11-25.
- Long, Edward. *Candid Reflections upon the Judgement Lately Awarded*

by the Court of King's Bench, in Westminster-Hall, on What is Commonly Called the Negroe-Cause, by a Planter. London, 1772.

---. *The History of Jamaica.* 3 vols. London, 1774.

Wheeler, Roxann. *The Complexion of Race: Categories of Difference in Eighteenth-Century British Culture.* Philadelphia: U of Pennsylvania P, 2000.